

「ああ、気持ちいい……」

熱い果実でほぐされる喜び。プリフは体を預けるようにして茜の奉仕に身を任せている。そして、藍子とみどりは茜の必死の努力を手に汗を握って見守る。

「ヒヒヒ……」

「メス……アサマシイ……」

かつては人間だった獣たちが少女たちに嘲笑を浴びせる。それでも茜は乳房による揉みこみをつづける。つづけざるを得ないのだ。砂時計の砂がさらさらと音をたてて流れていく。砂の流れは少女たちの運命そのもの。

「お願い、早く……我慢しないで、早く出して……お願いだから……」

茜は左右の乳房を両手で握り、擦り合わせる。揉みこまれるソーセージの先端がきりりと突っ張り、てかてかと光っている。綺麗なプラムのような亀頭。

「早く……早く……」

茜はうわごとのように呟き、砂時計に一度目をやった。時計の白砂は半分ほどがすでに流れて落ちてている。

「時間が……」

ショートヘアの少女はあわてて、プリフのペニスへの圧力を強める。圧力は当然のようにイボのついたソーセージを挟みこむ茜の乳房にも反射として戻ってくる。興奮



と恥じらい、動揺のせいで少女の白い肌を流れる汗の量が一気に増える。

「頑張つて……」

みどりが眩いて仲間を応援した。後は茜とプリフを信じるばかり。そして。祈りは天に通じる。

「あ、ああ、で、出そう……」

少年がのけぞる。想いが肉竿のなかを通つて吐きだされる素晴らしい瞬間。若者は顔を歪め、一方、茜は乳房を固く握つて、必死のラストスパートをかける。

大きく突きだした二つの膨らみ。幅の広い乳輪が激しいダンスを踊りつづける。茜の肉体を使った低劣なマッサージをもらった若い活火山が、ついに破裂の瞬間を迎える。

「うッ！」

プリフはうめき、その瞬間のこと。

ぶびっ！

赤黒い亀頭の先端から真っ白いエキスがはじけて飛んだ。綺麗な白の奔流。焼けるように熱い思いは、恥知らずな乙女の胸の谷間にぶちまけられる。

びく、びくくっ……。

若者の欲望が震え、浮きでた血管が脈動する。白く濁ったエキスは茜の乳房の中心

をねっとり濡らし、流れ落ちていく。消すことのできない肉の刻印。茜は自らの意思で邪悪な契約にサインをしてしまったのだ。

「あ、うう……」

プリフは夢見心地で喘ぎ、一方、茜のほうも顔を真っ赤にしている。

砂時計は……まだ完全に砂が落ちきっていない！

「ほほう。時を稼ぐことができたか……。だが、一人が首尾よくいっても、他の二人はどうかのう……」

黒は余裕たっぷりに言った。勝っても負けても黒の側には失うものなどない。最初から勝敗が動かない賭けほど楽しいものはない。一方、少女たちは相手の下劣さを知りながら、率の悪い勝負を挑みつづけるしかない。

「つ、次は……次は私が……」

藍子が茜に替わってプリフの前にひざまずく。乳房を突きだし、局部は剥きだし。恥ずかしい姿のまま、それでも藍子は少年のペニスに相對する。時間は充分にある。茜が我を忘れて破廉恥な乳房揉みに徹したことで削り取ったわずかなアドバンテージ。そのアドバンテージを失うわけにはいかない。

びくっ……びくっ……

若者のペニスは射精を愉しみ、少しずつ力を失っていく。藍子は目を血走らせ、衰

えていく少年のペニスを形のよいDカップバストに挟みこんだ。

「頑張つて……頼むから、大きくなって……」

ゆっくりと縮んでいくペニス。萎しぼんでいく肉の果実は少女たちの命そのものようにも見える。

「だめ……だめよ、小さくならないで……」

藍子は自分がどれほど無茶を言っているかを理解していない。

「プリフ、頑張つて……お願いだから！」

茜も胸の谷間を白く汚したまま叫ぶ。

「ああ、うう……」

少年も乙女の祈りに必死になっている。なんとしても自らを硬くして精を放たなければならぬ。そのことは少年もわかっている。わかっているのだ。だが……。

「大きくなって……大きく……」

藍子が言いながら乳房で挟んだ少年のペニスを揉みはじめる。小さく縮みはじめた若者のペニスがしごきによって勢力を取り戻しかかる。あと一押し。あともう少しのきっかけで少年は復調する。

藍子はためらうことなく、精液にまみれた少年の亀頭を口に含んだ。乳房で揉み、先端を唇で吸う。すべてを捨てた破廉恥はれんちな奉仕であった。そして、この必死の奉仕に

よって若い衝角は完全な復調を見せることとなった。

どくっどくっ……。

宝珠を埋めこまれた欲望が逞しく脈打ち、失われた硬度が急速に戻ってくる。

「やった……」

奇跡に茜もみどりも顔を真っ赤にして興奮する。

ちう、ちうう、ちうううッ！

破廉恥な商売女でもない吸引。令嬢は真剣に若いペニスに向き合い、これをしごいて亀頭を啜る。つんと上を向いた形のよい乳房。左右の乳房で若い欲望を挟んで、こねまわし、さらには先端を舐めまわす。

ちううっ！ ちううっ！

茜が搾りだした少年の白い精液で唇が汚れるのも厭わず、藍子は若いペニスを吸いつづける。

——なんとしても、砂時計の砂が落ちきってしまう前に……精液を、精液を……。

藍子は茜がそうだったように、取り憑かれたように乳房を両手で握り、ソーセージを挟んで揉みこむようにして激しく揺する。

「ん、んふー……ん、んふー、んふー……」

ロングヘアの副会長は固く握った乳房で左右から若者のペニスを圧迫し、擦り、刺

激し、同時に亀頭を唇で啣え、舌先で尿道口を舐めまわす。初めてとはとても思われ
ない藍子の恥知らずな動作に、黒が嘲笑した。

「生まれついでに淫売とはこのことよ。フッフ……」

ヒグマのように大きく育った怪異は、そこで、足もとに置かれた砂時計を手に取っ
た。すでに砂時計の砂は尽きようとし——そして尽きてしまう。黒は笑って砂時計を
ひっくりかえす。藍子の持ち時間がそこではじまる。

「首尾よく精を吐きださせることができるかのう……」

怪物は上機嫌で言う。

「フツカイチョー……プリフ、頑張つて……」

茜は祈るようにして言った。

くにゆくにゆくにゆ……。

すべてを託されたロングヘアの令嬢は自らの乳房を躍起になつて揺すり、躍らせる。
ぴーんと立った二つの乳首が艶かしく躍り、藍子の唇が涎と精液できらきらと輝いて
いる。

「ん、んふー、んふー……」

鼻の下を不細工に伸ばし、固く目を閉じたまま藍子はソーセイジへの奉仕をつづけ
る。惨めで破廉恥な行為。普通であれば絶対にしない、してはならない低劣な遊び。

藍子はだが、仲間たちのために、自分のために懸命に没頭する。

ぐにゅぐにゅ……。

宝珠つきのペニスが少女の真っ白い膨らみに包まれ、こねくりまわされる。

ちろちろ……ちう、ちううう……。

赤黒く染まった亀頭を少女の唇がすっぽりと啜くわえ、包みこむ。包みこまれたプラムの実の先端には藍子の舌が躍る。

——精子を……精子をなんとしても……。

高慢な少女はただそれだけを願い、握りしめた乳房を揺すりつつける。

「……紺野さん」

みどりは両手を自分の胸の前に重ね合わせて祈りつつける。なるべく早く早くプリフに精を放たせて、余裕をもって自分に順番をまわして欲しい。みどりは自分の巨大なミルクタンクを誇りながら、その膨らみの破壊力を信じきれていないのだ。

「頑張つて、お願いだから……」

みどりは呟いた。

そして、藍子は頼まれるまでもなく乳房を走らせつつける。挟んで上下動。挟んで左右の乳房を擦り合わせるようにして強烈マッサージ。亀頭には途切れることのない唇の奉仕。